



4月から1年をかけて、市民科学研究室の運営体制と活動内容の刷新をはかるための「談話会」と「目安箱」。前者は月2回のオンラインによる自由な討議、後者は自由な意見の書き付け。会員の皆さんはもちろん、会員でない方のご参加も切望しています。



Information

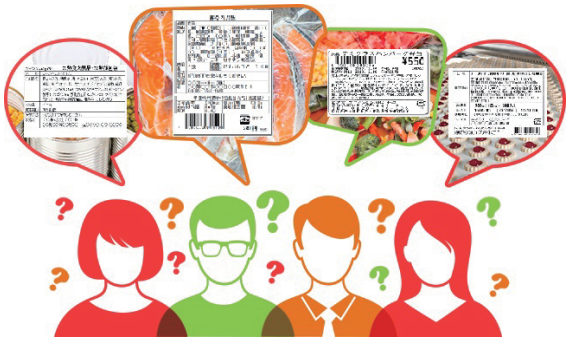
ワークショップ「加工食品の“加工”を探る」のお試しの会に参加してみませんか？

市民科学研究室の「食の総合科学研究会」では、現在、「加工食品の”加工”を探る」と題したワークショップのプログラムを開発中です。

このワークショップは、私たちの食において加工食品が占める割合がますます大きくなっているなかで、自分の食生活をよりよいものにしていくために、何をどう知り、判断していくことができるか、そのための障害や問題となってくることは何なのか、を具体的な素材を用いて議論し、改善の道筋を見つけようとするものです。ワークショップで目玉となる道具が、ワークシートです。これは、参加者に、自分が入手した食材について、主としてその成分表示の情報を前もって調べて、記入しておいてもらうものです。

そこで、このワークシートの記入を手がけてくださった方々のなかから、日程のご都合を確かめた上で、8名から10名くらい（2から3グループ）に参加していただいて、このワークショップの試作版を実施する機会を設けたいと思います。

市民研ホームページに、ワークシート書き込みの募集を行っていますので、ぜひご応募いただければと思います。どうかよろしくお願いします。



Event 市民科学連続講座

2020年10月9日(金)▶▶▶2021年9月10日(金)

連続講座「日本の市民科学者―その系譜を描く」(全12回)

市民科学研究室の代表の上田が講師を務める連続講座が継続中です。
市民・民衆・住民の命と尊厳と権利を守るために、ある時は「科学」と対峙し、ある時は自ら「科学」を営んで、闘ってきた先達たちの歩みを取り上げます。時代状況のなかで、彼らは何を目指し、何を切り拓いてきたか。私たちは何を受け継いでいるか(受け継がないでいるか)、受け継ぐべきか。これらの市民科学者らが関わった様々な社会事象に応じて10の切り口を設け、その活動の歴史的意義をつなげて考察します。参加者とともに議論しながら、これまで誰も描いたことのない、日本の市民科学者の系譜を、一緒に描いてみます。

- 第7回 4・9 洋学・翻訳・啓蒙―幕末と維新の知識人たち
- 第8回 5・14 農学、自然保護、動物愛護の底流―安藤昌益から現代まで
- 第9回 6・11 唯物論と科学史と鎌倉アカデミア―三枝博音を主にして
- 第10回 7・9 学問と教育の民主化―小倉金之助、遠山啓、板倉聖宣を主にして
- 第11回 8・13 科学者たちの同盟運動―民主主義科学者協会、日本科学者会議を主にして
- 第12回 9・10 <総合討論>日本の市民科学とは何か、何であるべきか

【日時・定員・参加費用】

- ・どの回も第二金曜日の夜です。19時00分に開始、21時00分終了です。
- ・質疑応答をしっかり行いたいのでオンラインでの定員は20名とします。また会場(市民研事務所)に直接赴いての参加者は10名までといたします。
- ・事前に市民研ウェブサイトから参加費500円をオンラインで送金していただくことが必要です。

【申し込み方法】

市民研ホームページから行ってください。電話やメールでの申し込みは受け付けておりません。

Event 市民科学談話会 連続見学講座

4月10日(土)アイカム映画上映会第17回 「医薬の思想史 病といのちへの先人たちの問いかけ」



2018年4月から開始しました、(株)アイカムと市民科学研究室が共同で実施する、映画作品上映企画の第17回目です。生命科学・医科学映像を製作し続けてきたアイカムは2018年に創立50年を迎えました。これまでに作った数多くの「いのちの科学映像」をテーマごとに精選し上映します。ゲストの専門家のコメントも交えながら、参加者のみなさんと“いのちと科学”について語り合いたいと思います。ぜひご参加いただければと思います。

アイカム社50周年企画 「30の映画作品で探る”いのち”の今」第17回

医薬の思想史 病といのちへの先人たちの問いかけ

- 上映作品：『薬へのプロムナード』（54分、1990年）
- ゲストエキスパート：山本秀樹さん（帝京大学薬学部環境衛生学教室教授）

- 日時：2021年4月10日(土) 14:00～16:00
- 会場：板橋区立文化会館 小ホール（東武東上線 大山駅から徒歩3分）
- 申し込み：アイカム社ホームページの専用サイトから or 電話：03-6905-6610



第15回
医薬と人類 長く深い関係をひもとく

第16回
ウイルスと細菌と感染症

の上映報告が、アイカムのホームページに掲載されています。

専門家と一般の参加者とか対話しながらともに学び合っていく、貴重な場になっています。ご一読ください。

Event 市民科学入門講座

3/29 子どもの脳の発達について考える 4/5 カーボンニュートラルな社会の中での木材利用 4/19 市民科学者のためのゴジラ入門

様々な問題に関心を持ち、様々な活動に関わっておられる市民科学研究室の会員の皆さん、そしてその方々のご友人を講師にして、それぞれの方に得意のテーマで「市民科学」を語っていただけないだろうか―そのような意図からこの毎月第1、3月曜日1時間のオンライン講座を始めることにしました。どなたでもご参加できます。30分ほどの話題提供の後、30分ほど皆で議論します。奮ってご参加ください。

●第18回 3月29日(月) 19:00～20:00

子どもの脳の発達について考える

講師：羽角章さん(市民研会員、神奈川県立高校非常勤講師、「新しい環境学習をつくるネットワーク」代表)
▶報告者が1980年代から教員をやりながら感じてきた子どもの変化と、脳科学から見たメディア・ゲームと有害化学物質の影響について考えてきたことを話します。

●第19回 4月5日(月) 19:00～20:00

カーボンニュートラルな社会の中での木材利用

講師：藤原敬さん(市民研会員、ウッドマイルズフォーラム理事長)
▶地球の炭素貯蔵庫としての都市の木造ビル群という記事がネーチャーにのりました。地球環境と私たちの生活環境の二つの面で木材利用の意味と注意点を議論します。

●第20回 4月19日(月) 19:00～20:00

市民科学者のためのゴジラ入門

講師：山口直樹さん(市民科学研究室会員、北京日本人学術交流会責任者)

▶世界的な知名度をもつゴジラ。しかし、中国大陆でだけはあまり知られていません。報告者の“北京ゴジラ行脚”などの経験を交え、日本と中国の間でゴジラを考えます。

- ◇主催：NPO法人市民科学研究室
- ◇形式：zoomによるオンライン形式
- ◇定員：毎回25名以内(先着順)
- ◇参加費：会員ならびに非会員とも無料
- ◇お申し込みは市民研ウェブサイトの該当ページより



市民研へのご入会／ご寄付のご案内

市民研の活動は会員となつてくださる方々の会費やご寄付によって支えられています。

市民研の活動にご賛同いただける方、支援をしていただける方には、ご入会やご寄付をお願いいたします。

ご送金・ご入会・ご寄付につきましては以下のやり方をお願いしています。

●100円単位の送金 100円単位のカンパや少額の送金(郵送費など)にご利用ください。

市民科学研究室の新しいウェブサイトのメインメニューに「ご支援のお願い」があります。そこから「市民研オンラインショップ」のサイトにつながります。そのなかに、「一口100円ご送金」のカードがありますので、ご利用ください。

●会員登録 年会費を送金して次のいずれかの会員になることができます。

★レイチェル会員……………年会費 10,000円（総会における議決権あり）

★ダーウィン会員……………年会費 3,000円

会員になると、以下のサービスを受けることができます。

1. 隔月の機関誌『市民研通信』の送付（会員は全文アクセス可、非会員には有料の記事論文あり）
2. 市民研メーリングリストへの全会員の登録
3. 市民研の各種研究会への参加（オンラインでの参加を含む）
4. 市民研主催のイベントで参加費が半額になりかつ同伴者割引も
5. 市民研が刊行した出版物の寄贈（レイチェル会員のみ）
6. 会員間講師派遣制度の利用（この内容についてはウェブサイトの該当ページを参照のこと）
7. 市民研主催の市民科学講座・各種イベント・研究会での配布資料、市民研の代表や理事メンバーらが講師として招かれた講演などの配布資料のうち、公開可能なものから精選して送付
8. 市民科学研究室所蔵の書籍・文献資料や映像資料の借り出し（期限1ヶ月）

●ご寄付 一口1,000円から受け付けております。

ご送金の方法は以下のいずれかでお願い致します。

郵便振替……………口座加入者名：市民科学 振替口座番号：00160-4-608503

オンライン決済……………市民研ウェブサイトの「参加費前払い 出版物・販売物」から

NPO法人 市民科学研究室 〒113-0034 東京都文京区湯島 2-14-9 角田ビル2F
Tel: 03-5834-8328 Email: renraku@shiminkagaku.org

はじめに

戦前期の日本には、多くの科学研究所が、設立された。国立の研究所をはじめ官学アカデミズムのものが、戦前期の日本では多かったが、異彩を放つ科学研究所が構想されていたことを知るものは、それほど多くない。それは民衆立研究所という研究所で、神田左京という科学者によって構想された。神田左京の著書には『不知火、人魂・狐火』（中央公論社2005）があり、その解説を気象学者の根本順吉氏が書いている。↓
そこでは、民衆立研究所のことにふれられているが、協力者が誰であったかは、具体的には書かれていない。

この民衆立研究所の構想に反応し、協力していたのは、実は、のちに満鉄中央試験所の所長となる九州帝国大学工学部応用化学教授だった丸沢常哉氏であった。ほかにも九州帝国大学医学部教授の宮入慶之助氏、九州帝国大学工学部地質学科教授の河村幹雄氏らが協力者として存在していた。他には、佐藤定吉という東北帝国大学工学部応用化学科の教授も協力者であった。この時期に官学アカデミズムとは異質の民衆立研究所が、構想されたのは、なぜか。設立には至らなかったのだが、その協力者たちは具体的には、どのような人たちだったのかを具体的に見ていきたい。

そのことによって戦前期日本の市民科学者の系譜にせまろうとするものである。

↓ 神田左京という科学者

民衆立研究所とは、神田左京氏が、構想していた研究所のことである。当時、官立の研究所としては、理化学研究所が創設されていた。理化学研究所は、1913年、高峰譲吉らが「国民科学研究所」の構想を唱え、日本資本主義の父といわれる渋沢栄一らが議論を行っていた。……

【続きは市民研HPにて】



0. はじめに

明治期の日本において、お雇い外国人に頼っての近代化政策から離陸し、国内に自前の高等教育機関を設立して、海外への留学を国家官僚や研究者のキャリアパスに位置付けることができる程度軌道にのったのは、日露戦争以降、20世紀初頭のことであった。そして20世紀初頭にいたっては、欧米世界が主導する国際的な学術会議・活動等へ一定の当事者性をもって参加することになった。その結果として、多くの国家官僚が留学中に見聞した欧米諸国の議論の動向を積極的に翻訳して国内において刊行している。日清・日露戦争を経て、日本は欧米列強に「肩を並べる」ところまで到達したことを自負し、そうした意識もあってか、ことさらに幕末・維新期の記憶を「後進性」を強調して描き出す傾向にあったこと、そしてそうした歴史叙述の練り上げが日清戦争の戦時において始まり、日露戦後には一般読者を対象とした雑誌に掲載されるところになったということには注意を払っておく必要がある。こうして19世紀から20世紀初頭にかけて幕藩体制期がことさらに遅れた社会として描き出され、その一方で、欧米の議論が積極的に紹介されていくことになる。

この時期に、第一次世界大戦が勃発する。廣重徹氏は「一九一四〜一八（大正三〜七年）の第一次大戦は、政治的・経済的に日本に漁夫の利をもたらした」としたうえで、大陸における日本の権益の拡大や、戦時に突入した欧米諸国の貿易の空白を埋めるように未曾有の経済的な繁栄を実現したといわれている。……

【続きは市民研HPにて】

第7章 市場メカニズム 基礎編

7-1 はじめに

いろいろな物やサービスの取り引きを、基本的に市場にまかせるべきか、それともいろいろ規制すべきかが、大きな議論になっている。

市場にまかせるべきだという立場（新古典派経済学：主流派）では、規制をなくして市場本来の機能を発揮させれば、経済活動はうまく行くと言う。では、現実に関制がある現実の市場ではどのように問題がおきると考えているかと言えば、それは独占・寡占市場など一部しか描けていない。理想的な市場が実現できれば、市場はこのようなメカニズムでうまく行くと言ばかりである。規制すべきと唱える側（反主流諸派やマルクス経済学など）は、規制を減らしていくとどんな問題がおきるかを描く。しかし、規制やそのほかの制約のある現実の市場がどのようなメカニズムで働いているかは描けていない。

結局、既存の経済学は、現実の市場をうまく描けていないのである。市場を描く経済学をミクロ経済学という。ミクロ経済学とは、おなじみの「需要供給曲線による価格と生産量の決定」を基礎とした「均衡市場」を描く経済学である。しかし、この市場モデルが現実に応用できていると思っている経済学者は、新古典派であっても少ない。理念の世界のモデルなのである。

そこで、この均衡市場モデルが前提としている非現実的な前提条件をすべて取りはらうと、どのような市場モデルになるのか。そこから出発して、新しい市場経済学を展開したい。

私が市場経済学をミクロ経済学とは呼ばないのは、市場はマクロ現象であって、決してミクロな現象だとは思えないからである。ミクロの立場とは、例えば一つの店がどのような販売価格を設定し、どれくらい在庫を確保するかという経営の立場である。

マクロの立場とは、例えばテレビの市場を国単位で、どのような価格でどれくらい売れるか、多くの売り手と買い手を想定して、モデルを築くことである。当然、いろんな価格で売れるので、価格分布を考えないといけない。それを表現するモデルを構築し、「価格分布のある市場モデル」と名づけた。……

【続きは市民研HPにて】

コロナ時代を生きる知恵

―大江正章さん『有機農業のチカラ』から学ぶ―

2021年2月1日（月）、毎週月曜夜の「市民科学入門講座」を担当させて頂きました。昨年12月に急逝された大江さんのご著書（残念なことに、ご遺稿となってしまいました）をテキストに、コロナと共生するこれからの食べものや農業のあり方について、参加者の皆様と考えてみようという趣旨です。
ちょっと「科学」とは遠いテーマでしたが、20名近くの方が参加して下さいました。上田代表の開会挨拶に続き、パワーポイントの資料を共有しながら、概要、以下のように説明させて頂きました。
冒頭、フード・マイレージの概要も含めた自己紹介に続き、大江さんの紹介と、スタディツアーやシンポジウムでの個人的な「思い出」の写真も紹介。目次から分かる通り、本書は幅広い内容を含んでいる。「まえがき」で大江さんは、コロナ禍は異常な産業社会・新自由主義経済が招いた当然の帰結であるとし、「脆弱な都市型社会と過剰な便利さの追求を見直し、第一次産業を重視し様々なレベルにおける食の自給を目指すべき。軸となるのは持続可能な社会をつくる有機農業」とされている。

有機農業の定義については、法律等においては「農薬や化学肥料、遺伝子組み換え技術を使わない」等とされているが、大江さんによると、有機農業とは「もう一つの農業」ではなく「本来の農業」であるとのこと。

また、日本の有機農業の取組み面積は増えているものの、ヨーロッパ等に比べると非常に低い水準にあるが、新規参入者の有機農業志向は高いことについて、大江さんは「彼・彼女らは納得できる仕事と生き方を求めている」と評価している。

……

【続きは市民研HPにて】

「肉」へのこだわり

現代のグローバルな「食料クライシス」を伝えるテレビ番組で、未来の「持続可能な世界のために、変革への“一歩”」となる一つの可能性として「人工肉」が紹介された。大豆やココナッツオイルなどが原料であり、「スタンフォード大学の医学者らが肉を分子レベルで解析し、再現された」という、その「肉汁」が映された後、番組の取材を受けた製造会社の人物はこう述べた。

私たちの理想は、本物の肉と真っ向から勝負できるような、本当にひき肉のような製品を作ることです。私たちは環境に配慮して世界の食料システムに関わる問題を解決したいのです（インポッシブルフーズ上級副社長、ニック・ハラ）。

美味しい「人工肉」の発想は、突然現れたようなものではない。「美味しさ」が示す「中身」がともなっていない「食品」が技術的にありうることは、実際に食べている「食品」の受容においては広く理解されていることである。そして、「安価に大量生産でき、食の問題を解決し、原料は安全でヘルシーである」ならば、「食品」として何の問題もないはずである。しかしながら、そのような「食品」の可能性は、それが何の理由に基づいて「有益」であるのか、「倫理的」であるのか、様々な社会的理由に基づいて肯定的にも否定的にも価値づけられる。

この番組では、先進国の「肉」への飽くなき欲望によって、その畜産にかかる資源やコストのために、グローバルな食料システムの非効率性、不公正な偏りが生まれてきたことが伝えられている。その上で、先進国の食生活のために「健康にも配慮した地球に理想の食事（材料）」が科学者によって推奨されていると示され、「肉は食べてもいいですが、量ではなく質を重視してください（牛や豚は週に98グラム）」。その直後に「人工肉」が提示されれば、この食品に飛びつく人々は少なくないであろう。……

【続きは市民研HPにて】



市民科学研究室は毎年年末になると、会員の皆さんから「私のおすすめ3作品」という原稿を募集しています。その年に読んだ本（雑誌や漫画も含む）や観た映画やTV番組、聴いたCDや足を運んだ展覧会やライブなどで、多くの人に勧めたい3作品を挙げていただき、それらにコメントを付けてもらう、という企画です。2007年から始めて、毎年『市民研通信』の原稿とさせて頂いています。2020年までの原稿をここにまとめてPDF ファイルでホームページに掲載しています。今回は以下の18人の会員の方々の寄稿がありました（到着順、敬称略）。

杉野実、吉岡寛二、澁谷徹、中瀬勝義、倉本宣、谷敦、山口直樹、白井基夫、角田季美枝、上村光弘、桑垣豊、鈴木綾、永井宏幸、中田哲也、丸山節子、権上かおる、林浩二、上田昌文

メディア掲載のお知らせ

●岩波書店の総合誌『世界』の2021年3月号（2月8日発売）は「21世紀の公害」を特集しています。市民科学研究室の代表理事である上田はそこに、「新たな公害の世紀 ― 電磁波の人体影響と社会の変容を中心に」と題した総括的な論文を書きました。

●昨年10月に上梓した『自分で調べる技術』（岩波新書）に関連して、沢井製菓が提供する「サイエンス シフト」というサイトから、著者の一人である上田がインタビューを受けました。全文が上記サイトに掲載されています。

